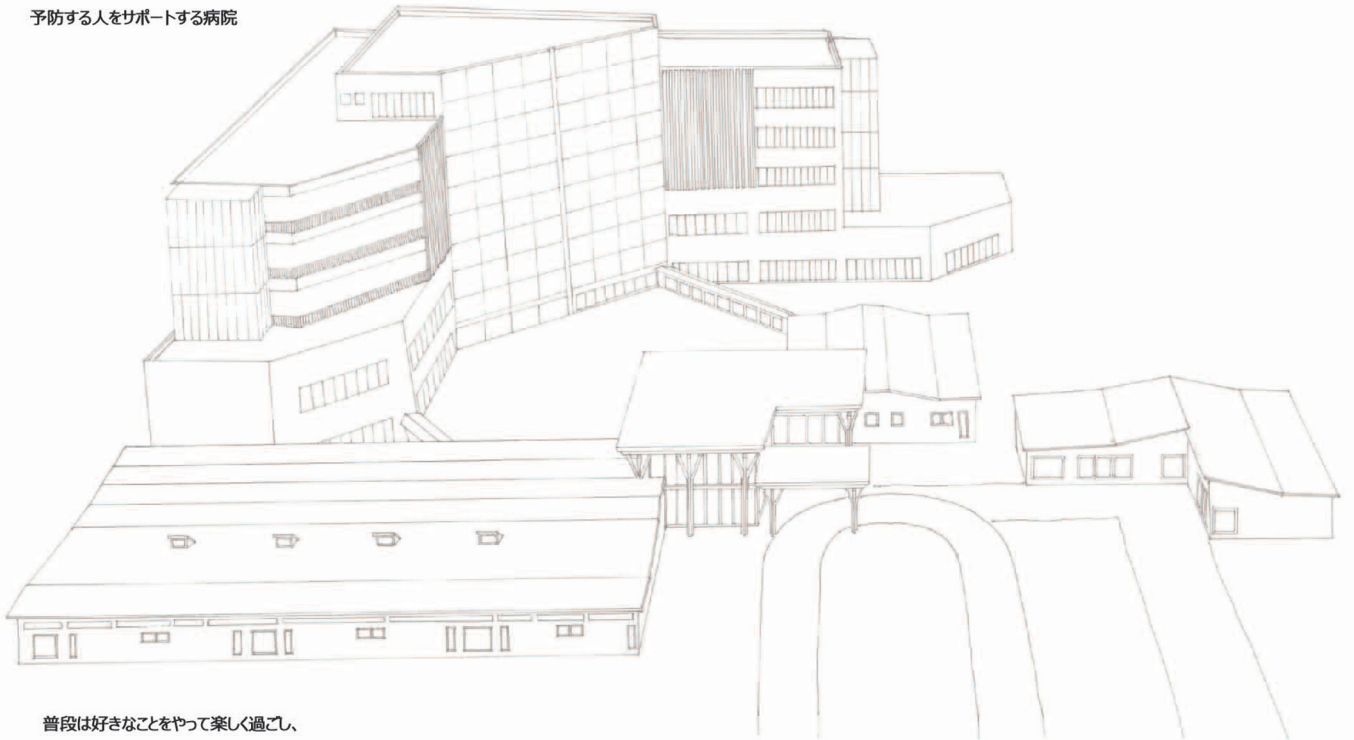


知ることは防ぐこと

予防する人をサポートする病院



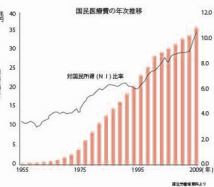
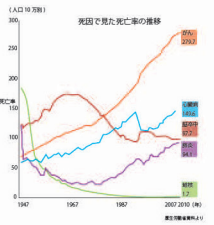
普段は好きなことをやって楽しく過ごし、
いざ病気になったら医療にお任せという生き方が楽である。
今は、痛くも苦しくないもので、「わかっちゃいるけどやめられない。」

高齢者が増える一方、社会資源が乏しくなるこれからの日本で、
もうそんな驚沢な生き方は、ひとりひとりが予防する生活にシフトしていくべきなのではないだろうか。

背景・問題提起

日本では、第二次世界大戦後、生活環境の改善や医学の進歩によって感染症が激減する一方で、がんや循環器疾患などの生活習慣病が増加し、疾病構造は大きく変化してきた。また、国民所得に対する医療費も年々増加している。(下図)

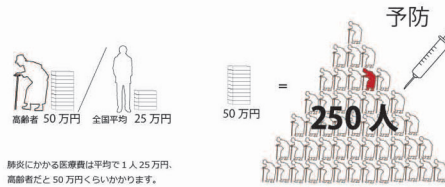
つまり、国民医療費は劇的に増加しているが、医療費の内訳として、日本国民それぞれが生活習慣を気付けさえすれば、減らせる部分が多くを占めている。そして医療費の国民負担は、1割〜3割と低いため、「病気になったら医療が何とかなってくれる」というまかせきりな考え方が蔓延しているように感じる。そんな人々の意識を改善する活動や、自分たちで予防や治療に積極的にかかわっていくこうとする活動を支えるまちの病院が必要とされるのではないかと考え設計に取り組んだ。



数字で見る予防医療の効果

～高齢者の死因第一位の肺炎の場合～

410720 TAKEI AZUSA 2/8



医療費削減

元が取れる！

50万円の医療費では、250人が肺炎球菌ワクチンを予防接種することができるので、この中の一人でも将来肺炎になるはずだった人がいれば元が取れることになります。

さらに肺炎球菌ワクチンの効果は5〜10年持続して、50〜80%の肺炎を予防できるとされているので長期的に見れば財政的にもプラスになり町の医療費もかなり削減できることになります。

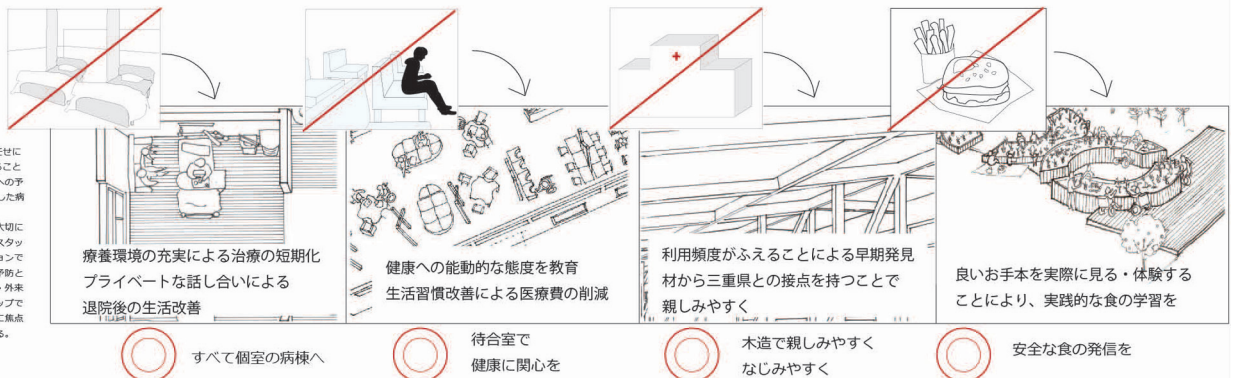
予防医療の分類



提案する、

予防を考えた総合病院

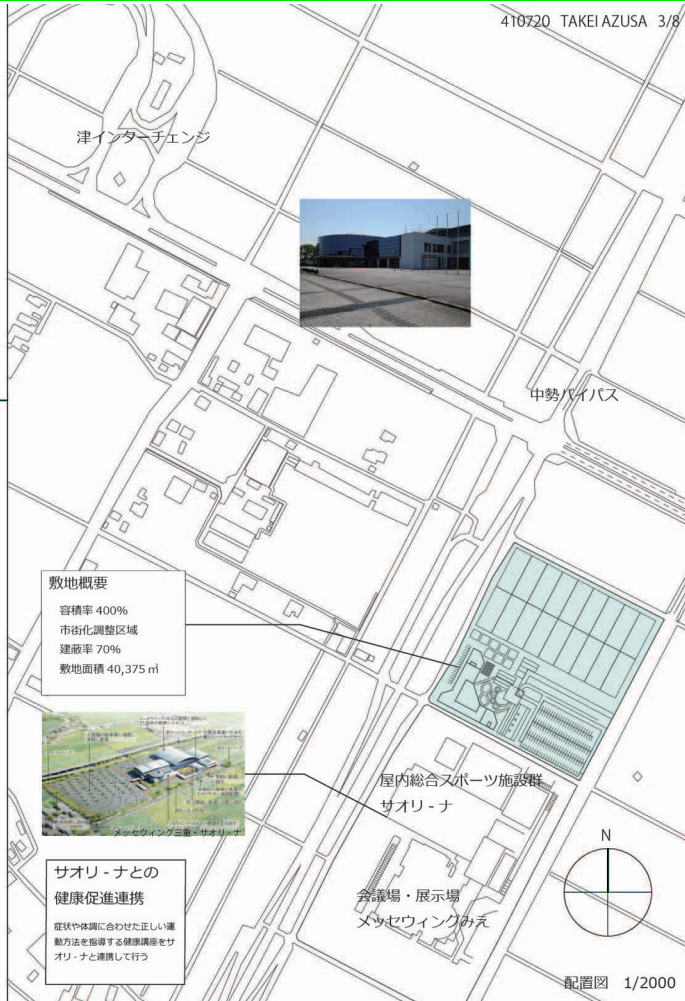
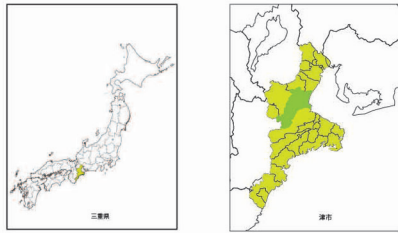
- 多床室では、気兼ねなく家族と先生とプライベートなことまで話せない
- 治してもらおうのを待つだけの医療への受動的な姿勢
- マスボリウムの親しみを感じられない病院
- からだに良い食べ物に触れる機会が減ってしまった時代性



敷地の特徴

三重県津市北河路町
 非浸水域・中勢バイパス・スポーツ施設

敷地は津インターチェンジと中勢バイパスとの交差点の敷地である。中勢バイパスは1966年国道路予定の道路市から国道路区間をつくる国道23号線のバイパスである。このバイパス沿いは住宅工場の増加や、工業団地などの開発計画が展開している等、これからの発展が期待される地域である。また、本敷地は、東南海トラフ地震の際の津波浸水予測では非浸水域であり、災害時の継続を必要とする病院の敷地には適正である。さらに、本敷地の西側には現在のメッセウイング三重という企業展示・研修施設があり、現駐車場敷地にはサオリ・ナと呼ばれるスポーツ施設群が建設予定である。そのため、予防医療には欠かせないスポーツプログラムでの連携を図れるばかりか、災害時には避難者が大勢一時的な生活を送ると予想されるため、避難所と病院での連携をし、市民の安全と安心を守る役割を担うことができる。

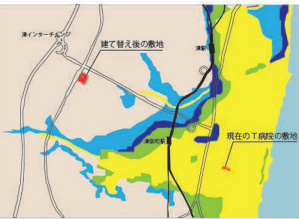


410720 TAKEIAZUSA 3/8

災害と敷地選定



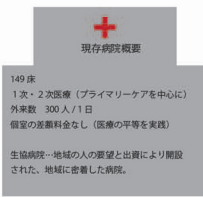
津市の津波浸水予測
 津浦線に、東北地方太平洋沖地震と同規模の東海・東南海・南海地震が連動して発生した場合の最大浸水深の分布。



既存病院の敷地周りは住宅地に囲まれており、地域と密着した病院としてはふさわしいが、現在のT病院の敷地は、若田川と津波浸水の間に位置し、海抜2.3m、最大浸水深2~3mという場所であり、震災の際の安全性が極めて低い。そこで、高層の敷地の確保を優先し住宅地とは少し距離があるが、車やバスでの交通の利便性で、津波浸水予測が0.5m以下の敷地を選定した。この新たな敷地は、南側に大規模スポーツ施設サオリ・ナが建設予定で、被災の際は多くの地域の人が避難してくる。避難所の前に敷地から通っている病院があるというのは、普段から地域の人々に安心感をもたらす、距離は離れていても地域によりそった医療を提供できるのではないかと考え、この敷地を選定した。

既存病院

津市本町にあるT病院の建て替えを仮想して計画をする。



基本理念
 私たちは、患者様の権利を尊重し、地域から信頼される医療機関を目指します。

ソフト食の取り組み
 既存病院は口から摂取する食事と治療の一部として重要視しており、栄養科や医師がチームとなって患者さん一人一人の希望に合わせて少しでも口から栄養をとれるように、専任までソフト食に力を入れて提供している。

現病院の歴史
 1953年9月の台風13号による堤防決壊で津市は市内中心全域が浸水の被害を受け、この時の医師や看護婦の献身的な救済活動に接した人々の運動により現病院の前身となる診療所ができ、その後、次々に科が開設され、現在の規模となった。

敷地概要
 容積率 400%
 市街化調整区域
 建蔽率 70%
 敷地面積 40,375 m²



サオリ・ナとの健康促進連携
 症状や体調に合わせた正しい運動方法を指導する健康講座をサオリ・ナと連携して行う

配置図 1/2000

410720 TAKEIAZUSA 4/8

コンパニオンプランツ
 お互いに助け合う植物を近くに植えることで栽培の手間を省くことができます。農業なしでも作業を軽やかな工夫の一つとして作物の栽培計画に取り入れます例えばイチゴ×メナス×ニワムシ等多数あります。

虫媒植物
 植物自体が虫媒等の効果を生かすもので、人の生活に近いところに植えるとアラスや虫媒効果的です。虫媒植物の葉を減らすことができます。



安全な食の発信

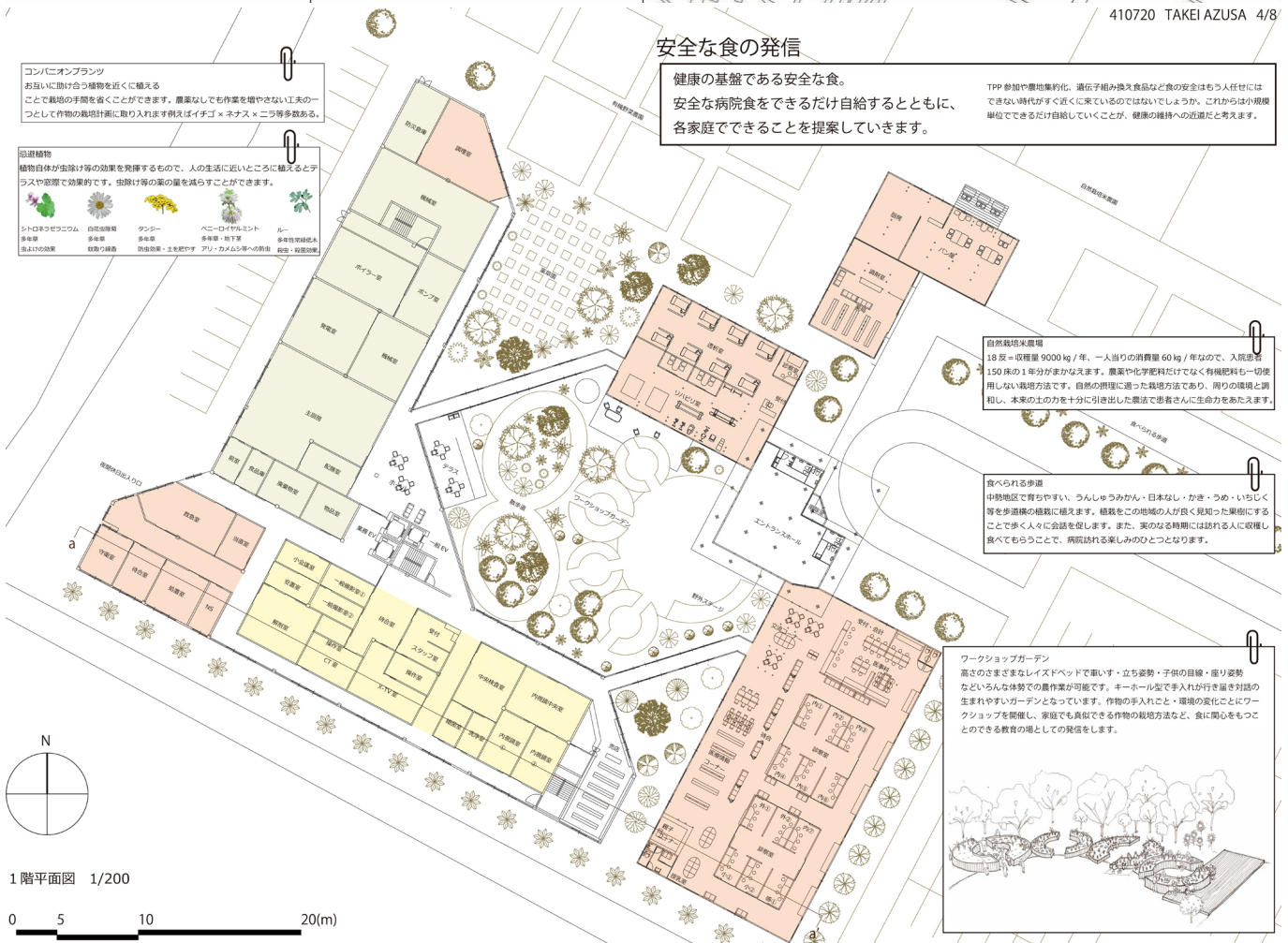
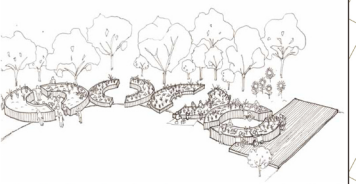
健康の基盤である安全な食。
 安全な病院食をできるだけ自給するとともに、各家庭でできることを提案していきます。

TPP 参加と農地連携。遺伝子組み換え食品など安全はもう人任せにできない時代がすぐ近くに来ているのではないのでしょうか。これからは小規模単位でできるだけ自給していくことが、健康の維持への近道だと考えます。

自然栽培米産地
 18反=収穫量 9000kg/年、一人当りの消費量 60kg/年なので、入院患者 150床の1年分がまかなえます。農業や化学肥料だけでなく有機肥料も一切使わない栽培方法です。自然の摂理に導く栽培方法であり、周りの環境と調和し、本来の土の力を十分に引き出した農法で患者さんに生命力をあたえます。

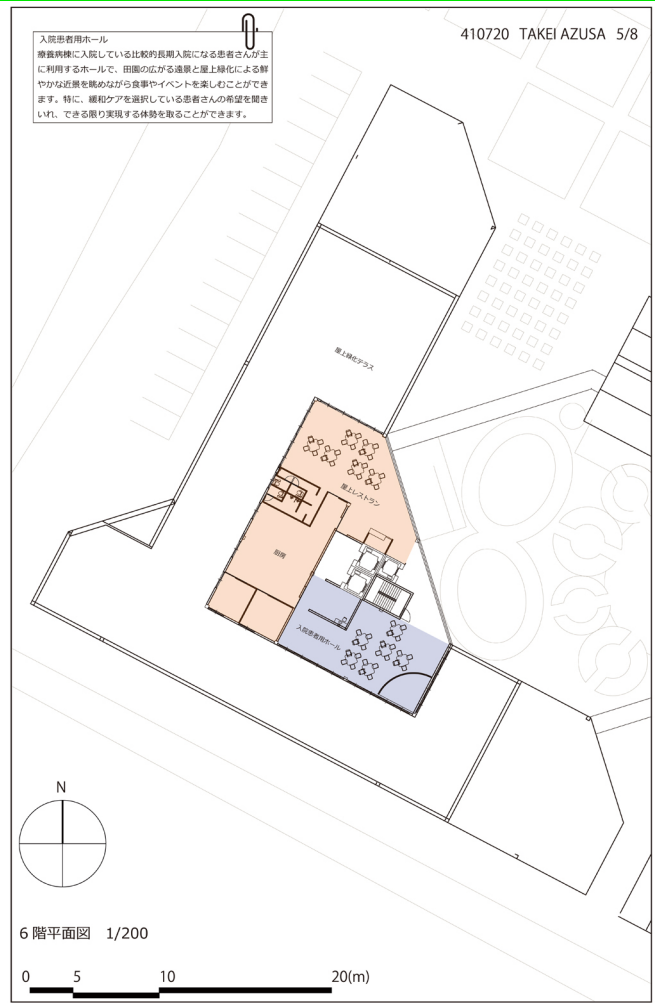
食べられる歩道
 中勢地区で育ちやすい、うんしゅうかん・日本なし・かき・うめ・いちじく等を歩道横の緑帯に植えます。植栽をこの地域の人がよく知った果樹にすることで歩く人々に会話を楽しめます。また、歩道の緑帯には訪れる人に収穫し食べってもらうことで、病院訪れる楽しみのもつこととなります。

ワークショップガーデン
 高さのさまざまなレイズドベッドで、立ち姿勢、子供、高齢者、障がい者などいろんな体勢での農作業が可能です。キーホール型で手入れが行き届き対話の生まれやすいガーデンとなっています。作物の手入れと、環境の変化に伴ってワークショップを開催し、家庭でも真似できる作物の栽培方法など、食に関心をもつことのできる教育の場としての発信をします。



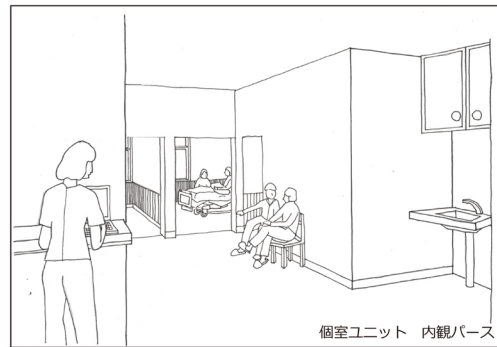
1階平面図 1/200

0 5 10 20(m)



すべて個室の病棟 410720 TAKEI AZUSA 6/8

家族とのプライベートなお金や生活のことまでとことん話し合うことで不安を取り除き、個室のリラックスした環境で入院の短期化・退院後の生活の改善を目指します。



多床室的個室群
 個室はユニットの内部に面する戸を開放し、多床室のように他の患者さんやナースと交流を図ることができ、面会時間や夜は戸を閉め完全な個室にすることで、家族や先生との気兼ねない話し合いや、リラックスした一人の時間を過ごすことができます。また、各ユニットのナースコーナーでナースが作業をするため、患者さんとの接点を減らすことが可能です。温度調整や装飾の自由度も向上します。

